
家族けーかく無計画

《》

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族けーかく無計画

【Zコード】

Z0472BA

【作者名】

『』

【あらすじ】

とあるカフェ店を経営してゐる一家の妹6人+兄が天宮町で、計画を作つたり作らなかつたりしながら、奇想天外を織りなすハートフルコメディ

第〇計画 倉木一家のプロローグ（前書き）

処女作なので、皆様の期待に添えるかわかりませんが、頑張りますので宜しくお願いします。

第0計画 倉木一家のプロローグ

俺は十一歳の頃、乾パンを持たされて、あまみやぢょう天宮町に棄てられた。

正直悲しかつた。

そしてつらかつた。

すると、そんな俺を拾つてくれた男女の大人一人が居た。

それから俺は、倉木家の一員となつた。

しかも聞けばその一人は俺の他に、あと6人の子供達を育てているではないか。

そいつらは、全員年下の妹達らしく、俺が倉木家の長男となつた。

そして今では、十年の時間が経つた。つまり俺は二十一歳。妹達もしつかりと成長し、個性が出始めた。

高一の十六歳の葵。

中一の十三歳で双子の桜、すみれ薑。

小四の九歳で三つ子の、椿、楓、華。

そんな7人の妹をもつ俺の名前は、零。

れい

彼女はいません。いたつてそちら辺のお兄さんです。

そんなわけで俺はいつものように、妹達の一騒動に我が家が経営する倉木カフェ店が巻き込まれていくわけです。

ま、楽しいから良いんだけどね。

え？ 別にMつてわけじゃないからね。

第1計画 倉木一家の倒産危機

「赤字だ……」

どうも……倉木零です。いきなり、シリアスな展開ですみません。あらすじに『ハートフルコメディ』なんて、書いてありますますがありません。ぶっちゃけ、今ヤバい状況です。

それを今、葵と一緒に我が家の一室で話し合っています。因みに、双子と三つ子はもう夜遅いので居眠り中。両親は出稼ぎで、帰って来ません。

「お兄、ほんとにびうるの。このままだと、倉木カフェ店が倒産しちゃうよ」

机の向かい側に座っている俺の妹で長女の葵が机を叩いてそう言った。

身長159cm。肩と腰の中間くらいまで伸びた、サラサラして赤みがかった茶髪が特徴のペッタソコでスレンダーだけど美少女だ。

確かに葵の言つとおり、我が家のかフェ店は倒産しかけていた。今はそのことについて話しあっている。

「それもこれも、全部お兄の所為だよ」

「俺かよー!?」

「当たり前じやん。先月、訳あっての休みのとき、お兄が店の前に
とんでもない貼り紙を貼つたじやない」

「あれ？ 確かにそういうことはやったけど、紙に向て書いたつけ
？ 正直、覚えてない。」

「はあ、呆れた。本当に覚えてないのね」

「すまん。俺なんて書いたつけ？」

「『『今日一日サボります』よー。普通『今日一日休みます』でしょ
！？ 事実にしてもせめて、マシな嘘つけばカフェ店の評価は下が
らなかつたでしょ？』」

ああ、そんなこと書いた覚えあつたわ。そのおかげで評価ががた
落ちしたんだよな。なるほど、これが原因か。

でも、どうしよう。これでは本当に、『ハートフルコメティ』が
『ハードフルコメティ』になりかねん。

葵は呆れ果てながら、血煙のサラサラ髪をたなびかせると、また
口を開いた。

「ともかく明日は私たち夏休みだから、その間に巻き返すわよ。はい、お兄提案」

「なにその面白いことと言つてみたいな無茶ぶりはー? まあ、提案はなすことはないんだけど……」

「評価上げるには、店員の愛想や服装が大切だ」

「やる気を客に見せて、私たちの評価を上げるわけね。それでその方法は?」

「まずは、服装からだな。なるべく人が喜んだり、和んだりする他の店にない俺たち独特の服装をしようと思つ」

「だったら、メイド服とかアウトなわけ?」

メイド服……妹達のメイド服……

「聞けってるわよ、変態兄貴」

「すまんすまん。とりあえずメイド服はアウトだ。ありきたりでオーリジナリティに欠けるからな」

「だったら何を着るのよ

「スク水」

「バキッ
天誅！！」

「ぐほ！？ いきなり竹刀で人の頭を叩くんじゃねえ！！ てかな
ぜポケットから竹刀が出てくる。ドラえもんかよ！？」

「黙れ！《バコ》変態！《ドカツ》魔神！ 人間の屑！《ガツン》
そんなことしたら警察が来てしまうわ！！」

「酷い。四回も竹刀で殴った！？ 親父にだって二度も殴られたこ
と《バキ》グハツ」

「死んでしまえ」

……さすが俺の妹。相手がなんと言おうとも容赦ない一撃をたた
み込む。

「分かつた。悪かつたから服装ドカツより新しい提案をし《ドコツ》よう。
だから《バキ》殴るのを止めよう」

そう言つと、葵が竹刀で殴るのをよけ止めた。頭の上から鉄
の臭いがするのは氣のせいだと思つ。

私はバカ兄貴の頭をコテインパンにした。

これでもお兄は大学に通つてたから、頭は悪くならないと思つ。頭から赤い液体が流れ出るけど、気にしないのが一番だ。

でも、お兄の提案か。まるでないことだと思う。あまり信
用できない。

「紙芝居でもしようか」

「ハア！ 子供っぽくてやつてられないわよ」

「俺達のカフエは子供大人関係なく来るんだぞ。それに子供っぽい
から否定てのは、お前のわがままじゃないか」

「うう……」

確かにお兄の言つことは正論だつた。私たちが今立てる計画は、
飽くまで密の為であつて、私のわがままで動いてるんじゃない。
…まあ、どちらにしろお兄のスクール水着は私に限らずみんな断固
否定するけど。

「で、その紙芝居はオリジナルにするの」

「勿論」

「うう……、お兄のオリジナル紙芝居なんて不安。下手すれば、教育上よろこべないお話に仕上がるかも。

お兄少し考えると、髪とペンを持ち出してきて、スラスラ書き始め、ペンを止めた。

「どうきたの？」

「バッヂリ、タイタニックに乗ったつもりで任せとけ」

「沈むじやん」

「じゃあ、読むよ」

なんか嫌な予感かしない。バカ兄貴が書くお話なんて……

「#あるある所におひやんとババアが居ました」

「うん、王道な始まり方だけど、キャラは丁寧に扱おうね」

「おば様は川へ洗濯に、おじ様は山へ焚刈りにこきました」

「セミまで丁寧に扱えと言つてないから」

ていうか、聞いたことあるよつね……やっぱり嫌な予感が……

「おばあさんが川で洗濯物をしていると、ドンパクパクパクパク
大きな桃が流れてきました」

「盗作は駄目よ」

「まあまあちゃんと、オリジナルだから、タイターックに乗つたつ
もつて任せとけ」

「だから沈むつてばー。」

「おばあさんは大きな桃を近づいてよく見てみると、桃にハエがた
かっていました」

「腐つてるー？ その桃腐つてるー？」

「おばあさんは桃を持ち帰り、おじいちゃんと一緒に食べようつとし
ました。しかしいくら待つても帰つて来ません」

「持ち帰つたー？」

あれ、でも新しい展開だな。

「嫌な腐敗臭におばあさんは顔を歪めます」

「氣づいてるのー？ なぜ捨てなかつたー？」

「おばあさんは『なぜ臭いんじや』と顔をしかめます」

「おやかの氣づいてない！？」

「おじこさんがいつまで経っても帰って来ないので、おばあさんはシメシメと一人で桃を食べるため、いつもと同じように『斬刃』で滅多斬りにしました」

「どうから持ち出した斬魂刀！？ つて桃潰れるわ

「その前に家」と吹き飛びました

「桃たるーーーー！」

「しかし、舞つた土煙に一つの影が！？」

おやか……

「ヤリにまだ刈りに行つてたおじこさんが、桃から出てきてズタボロのまま立つて居たのです

「おじさん！ 芝刈りに行つてたのに、なぜ桃に入つて川から流れて来たんだ！？」

「するとおばいさんは『ちつ、しとめ損ねたか』と刀を向けました

「おじこさん桃に入ったの知つてたの！？ 酷いよおばあさん！…

「するとおじいさんが『ふん、アブねえババアだ。しかしこの程度じゃ』の俺、ホムンクルスは倒せねえ』と言つと、体の傷がみるみるうちに治りました

「まさかのおじいさんホムンクルス！？」

「するとそれを見ていた観客が盛り上がりました」

「いつの間に観客！？」

「すると審判は『どちらともチートです』といい、司会は『そうですねえ』と吸け答えました」

「本格的な試合になつてゐる！」

「おじいさんはメタルギアを呼び、おばあさんはエヴァを呼びました」

「アーネスト？」

「同会は『メールが来ました』とメールを読み始めました」

「メール！？ 生放送なのこの試合！？」

「『ペンネームは、ペーチタロウさんです』」

「そこにいたか桃たろう―――？」

「『全駱と書いてあつまつ』」

「しかもダイナミック！」

「そんな」として、元気、勝負がつきました。しかし、審判は

まともに試合を見てないので」

「審判すらまともじゃない！」

「審判は顔をしかめつかせ、『カカロツト―――』と叫びました」

「審判いきなりどうした！？」

と、そんなこんなでお兄の摩訶不思議な桃太郎？が終了した。

「どうだ！俺の力作は！！」

「死ね《バギ》」

「ガハア」

お兄は限界がきたのか、そのまま倒れた。
うん、明日になつたら無事だろう。

それより、どうしようか。評価を上げる方法が思い浮かばない。
このまま私たちは、明日を迎えることになった。

本当に大丈夫かな？

第1計画 倉木一家の倒産危機（後書き）

次回妹達を全員登場させます。

もつ少しで2012年ですね。次回も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0472ba/>

家族けーかく無計画

2011年12月31日23時45分発行